<巧 峰>

qiǎo fēng

zhōu lù
周 路

学校に行っていた頃の巧峰

巧峰の家は南塬村の入り口にあるので、村を訪れるときはいつも此処で休むことにしています。足を休めたり、水を飲んだり、ついでに持参した写真の人物が誰かを巧峰に教えてもらい、一緒にそれぞれの家に写真を届けに回ります。いつも全部済むまで同行してくれるので私は感動し、巧峰も《 陝北女娃》に加えることを決めました。

‘大きくなったら何になりたいか’のアンケート（＊）に、‘警官に成りたい’などと書くので驚きました。どこからこんな希望を思いついたのでしょう？多分、テレビでみた警官物の番組のせいでしょう。しかし、彼女は五人のきょうだいなので家には余裕がありません。この願いは夢で終わってしまうでしょう。

その後再び南塬村を訪ねて学校を止めてしまったことを知りました。どうしてかと訊ねますと家庭が苦しいからとのことです。確かにそれが一番の理由でしょうが、村の学校の教育水準も低く、生徒達の成績が伸びないということもありますし、何よりも女の子は学校に行く必要はないと思われているのが一番の理由と思います。たまたま見かけた、巧峰より２、３歳年上のお姉さんは大きなお腹を抱えていましたが、巧峰が同じ道を辿るのもそんなに遠いことではないでしょう。

2004 年 7 月の巧峰

２００４年７月上旬に、私が又南塬村を訪れますと、村の入り口のところで、色白の、透き通るような肌をした丸顔の少女が私に向かって笑いかけてきました。よくよくみればそれは巧峰で、すっかり変わってしまっているのでびっくりしました。この少女が学校に行かなくなって２年余りをずうっと家で家事を手伝っていました。どういう訳か髪の毛は町の子どものように黄色く染めており、体はすっかり女性らしくふくらんで、いつでもお嫁に行けるようです。

以前と同じように、巧峰は私を連れて、丘陵で野良仕事をしている巧琴の家族のところに案内してくれ、村はずれの新しい窑洞では丁度食事をしている亚亚に会いました。そして私達は村の一番高い丘に登って何枚か風景を撮り、巧峰と巧琴を一緒に記念撮影をしたりしました。巧峰の写真を撮るときは花嫁の雰囲気をカメラに収めたいと思いましたが、しかし、カメラのレンズを通してみますと、カメラを横にしても縦にしてもどんなにしても巧峰はやっぱりまだ女の子でした。

陝北にはこのような女の子達が相当数います。何年か小学校に通いますが、殆どは小学校の卒業と共に勉強は止めて、家で家事を手伝い、畑仕事に従事し、しばらくすると仲人が訪れて、相応しい人が見つかれば、結婚という生涯の大きな節目を越えます。その後は婚家の先祖のために線香を絶やさず、子どもが育つのを楽しみに、そして、村のおばさんたちに加わって、村の娘達の結納品や結納金の品定めをしたり…、そうです、女性達は殆ど変わることなく、千年を超える黄土高原の地での歳月を、毎年、春夏秋冬を迎えては送り、毎日、東の山に太陽を迎えては西の山に沈む太陽を背にして過ごしてきたのです。